
セピア2 友達じゃない恋人じゃない

山本哲也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セピア2 友達じゃない恋人じゃない

【NZコード】

N3840D

【作者名】

山本哲也

【あらすじ】

ストーリー：バイト仲間の安西可奈から無理矢理テーマパークのチケットをペアで買わされてしまった亮太。意を決した亮太は美雪を誘つてみるが、美雪は他に用があつたため断られてしまう。仕方なく典子と行くことにする亮太。今まで幼なじみとしてしか見ていなかった典子に女性を感じ、戸惑う亮太…。また、典子は募る亮太への思いに悩み、テーマパークのアトラクションの占いの結果に希望を抱いてしまう自分に苦しむ…。セピアシリーズ第2話。

ピンポーン

亮太の部屋のチャイムが鳴った。

「へいへい」

めんべくそそうにそつ咳きながら、テレビゲームにポーズをかけ、玄関まで行つてドアを開ける。

「おじやましまーす…」

思つた通り、幼なじみの典子だつた。典子は時々こいつして亮太の部屋にご飯を作りに来つてゐるのだ。

「亮太、ちょっと付き合つて」

入つてくるなり、典子は言つ。ぴたりとした細身の白いズボンの上にニットアンサンブルという姿の典子の手には色々書き込まれたメモがあり、亮太にはその意図がすぐに分かつた。

「嫌だ。どうせ買い物だら」

亮太は素つ氣なくそう言つと奥に入つてゲームの続きをやるつとする。

「あつそ。じゃ、もうゴハン作つてあげない」

亮太はぴたりと立ち止まつた。振り返ると、典子が得意げな笑顔で立つてゐる。

「…」

がつくりと肩を落とす亮太。亮太に拒否権はなかつた。

もうすぐ始まる連休が待ち遠しい、四月の午後のこと。亮太は大きな紙袋いっぱいの食料を抱えている。

「重いなあ。何でいつもこんなにたくさん買い込むんだよ

「亮太が食べるんでしょ」

典子はそういうながらレシートを見ていた。時折何かぶつぶつと呟いてゐる。

「…二ンジンが三本で百九十八円…」

「まるで主婦だな」

亮太が嫌味を言つと、典子は顔も上げずに亮太を小突く。

「いてつ」

これは毎週のように二人の間で交わされている会話だ。二人は大抵、土曜日に次の週の分の食料をまとめて買い出しに行つているのだ。

「あれえ、亮太君じゃない？」

抱えている大きな紙袋の向こう側から、聞き覚えのある声が聞こえた。

「加奈ちゃん？ どしたのこんな所で」

亮太がそう言うと、紙袋の向こう側からセミロングの髪の女の子がひょいと顔を出した。フレアミニのスカートにボーダーのTシャツ、その上からはパークーを羽織つっていて、いかにも活発そうな女の子だ。

彼女は、亮太のバイト仲間の安西加奈。

典子よりは少し小柄だろうか、向かって左側の前から横にかけての髪をボンボン 円いプラスチックの玉飾りが二つ付いた髪をまとめるためのゴムの事 でまとめているのがちょっと幼い印象すら与えている。

「どしたの、じゃないでしょ。バイトの帰りよ。今日ね、すつごく混んで、もー大変だつたんだから…」

加奈がオーバーな身振りで話すと、それにあわせてボンボンでまとめた髪が揺れる。

「…でね、そのお客様が怒っちゃつて… って、あ…」

加奈は急に真面目な顔になつたかと思うと、亮太と側にいる典子の顔をかわるがわる見比べる。

「へーえ、亮太君、なかなか隅におけないなあ。このこのつ」

加奈はニヤニヤ笑いながらジト目になつて肘で亮太をつつく真似をした。

「な、何だよ、その顔は」

何の事だか解らずに亮太は尋ねる。

「いーえ、何でもありません。ごめんね、邪魔しちゃって。じゃ

亮太に向かつてそう言い、典子に軽く会釈をした加奈はなにやら意味ありげな笑顔を残して行ってしまった。後に残された亮太はポカンと口を開けたまま、典子の方を見て尋ねる。

「…何だ、あれ？」

「知らない」

典子はやれやれという風に溜め息をついて肩をすくめた。もちろん、典子には加奈の笑顔の意味はわかっている。だが、それをいちいちこの鈍感の上に「超」がつくほどの男に説明してやる気力はない。

(ホントウーンウダツタライイーーー…)

典子の心の中の何かが、そう呟く。

不意に、典子は胸が締め付けられているような感じがした。

(ただの幼なじみ…)

その何かを押さえ込むように、そして自分自身に言い聞かせるよう、そつと心の中で呟く。その言葉は、いつしか典子にとって自分の心の中の何かを鎮めるための呪文のようになっていた。

加奈は亮太と同じ、亮太の叔父が経営しているファミレス、「ジヨックス」でバイトをしているフリーターの女の子だ。亮太とは同じ年のせいか、それとも持ち前の明るさのせいか、結構仲がいい。何でも、一度高校に入学したらしげが、物足りなさを感じてわずか3ヶ月足らずでやめ、その後、実家を離れてこっちで一人暮らしをしているのだという。実家は結構遠い所にあるらしいが、加奈はあまり自分の事は話さうとはしなかった。

「さ、亮太、ぼさつと突っ立つてないで行こ」

「お、おう」

あきれたような顔の典子に促され、亮太はきょとんとした表情のまま歩き始めた。

あと一週間とちょっとで中間テストが始まる。

「いつそのこと連休の前にテストが終わってしまえば思いつきり遊べるのにと思う。もつとも、どちらにしろ亮太に勉強する気はないのではあるが…。」

「ふあ…」

連日遅くまで勉強しているのだろうか、今日の典子は何だかとても眠そうだ。時々あくびをかみ殺している。包丁を持つ手もいつもなく危なっかしく、見ていられなくなつて亮太は言つ。

「お前の指入りの料理なんてのはじめんだぜ」

「黙つてなさい」

それから暫く、二人はそれぞれのしていた事を黙々と続けた。トントンと野菜を切る音と、控えめなゲームの音が部屋に響く。あまりつるやくしてると典子に怒られるからだ。やがて、典子が

「痛つ」

と小さな悲鳴を上げ、左手の人差し指をくわえた。

「…ほら見る、ほーっとしてつからだよ…こいから。そこで座つてる」

ちよつと偉そつにさう言つて、典子をローテーブルの脇に座らせると、亮太はゲームをやめ、あちこちの戸棚や引き出しを引つかけ回す。だが、お皿当てのものは見付からない。

「…えーっと、絆創膏つてどいだっけ？」

やがてぼりぼりと頭をかきながらとぼけた様子で典子に尋ねる。

「テレビの隣の小物入れの上から一番皿」

その様子を見ていた典子が、「やつぱつ」とこいつみな調子で言う。すっかり呆れているようだ。

「お、あつたあつた。典子、手、出せよ」

そんな典子を無視して、亮太は引き出しから絆創膏の箱を取り出し、ローテーブルの側にあぐらをかけて典子を呼び寄せる。

「い、いわよ。そのくらい、自分でやるから。貸して

典子が頬をほんのりと染めてちょっと照れた様子で断わりとする
が亮太は気づかない。

「やつてやるよ。片手じゃやりにくいだろ」

そう言いながら亮太は典子の手を取つて自分の方に引き寄せた。
典子は黙つてされるに任せた。顔を上げ、亮太の方をそつと伺つ
と、亮太は典子の指の傷を消毒して絆創膏を貼るのに夢中になつて
いる。

（亮太…）

典子は右手をそつと握つた。

「ほい。できただ」

そんな典子の様子など全く気づいた様子のない亮太が誇らしげな
声で言つ。典子はその声ではつと我に返つた。顔が火照つているよ
うで、俯いたまま顔を上げられない。

「あ、ありがと。でもさ、手当してもらつてこいつ言つのは何
だけど、ここは亮太の部屋でしょ。そのくらいの場所、覚えてない
の？」

わざと馬鹿にするような声で、典子は言つ。

「つるさいなあ、いちいちそんなこと覚えてられつかよ」
「…もひ。しうがないなあ。いーい？ あたしだつていつまで
もひつして来られるつてわけじゃないんですからね。亮太より先に
結婚しちゃつたらどうするの？」

「へへーんだ。お前が俺より先に結婚できるのかよ」

「言つてくれるじゃない？ 亮太おぼつかやま。美雪と手ぐりで
は握れるようになったのかしら？」

馬鹿にした声で典子が言つ。

「そ、そんなのも一バリバリだぜつ…」

亮太が精一杯の虚勢をはる。

「ほほーつ。どうバリバリなのか説明してもひむづじやない？」

悪戯っぽく微笑んだ典子が全く信じていない様子で尋ねる。

「う…」

亮太が返答に困っていると、台所の方でしゅうしゅうとうとう音が聞こえてきた。つけっぱなしだった味噌汁の鍋が吹きこぼれているらしい。

「あーっ！」

典子があわてて火を止めに行く。今日の料理は典子にしては散々な出来だった。

「…ゴメン」

さつきまでの低レベルな会話は何処へやら、神妙な声で典子が言う。こと料理の事となると、典子は要求が厳しい。

「ふあにがあ？（何が？）」

亮太は口いっぱいにご飯を頬ばつている。

「この料理。こんなにひどいなんて」

典子が自分の作った料理を見ながら言う。確かに、ちょっとぐちやつとしていたり、焦げたりしているが、そうひどいとも思われない。気にせず亮太は食べ続けた。

ピンポーン

その時、玄関のチャイムが鳴った。

「はい？」

亮太がドアを開けると、外に立っていたのは見知らぬ小柄な中年の男だった。

「あ、どうも。毎朝新聞の者ですが、今、新聞はどちらかお取りでしようか？」

銀縁眼鏡の奥の細い目が一目でそれと分かる愛想笑いを浮かべている。

「あ、いえ…」

もう間に合つてしまふと言つてしまえばいいのに、何故かいつも正直に答えてしまつ。

「だつたらどうでしょ、今ならビール券六枚に、アースガルドのチケットをお付けしますから」

「いや、どうせ読まないですし、結構です」

「そうね。じゃあ三ヶ月だけでもいいですか?」「いや、いや…」

「まだやつてるの?」「亮太の様子を見かねてか、典子が出て来る。

「あ、ども…」

「新聞なんて読みこなしてですから、要りません」

新聞屋が挨拶しようとするのを制して、典子が言つ。

「いや、でも…」

「結構です」

口を開きかけた新聞屋に、典子がぴしゃりと言つた。新聞屋はついにあきらめたのか、口の端でぼんぼんと齒くちづいて、「またよろしく」と言つて帰つていった。

「サンキュー」

ほつとして亮太は典子に礼を言つ。典子がいなかつたら一体どのくらいかかっていたことだらけ。いつも、亮太はこの新聞の勧誘に悩まされているのだ。

「取る気がないんだつたらきつぱりと断らなきゃダメつていつも言つてるでしょ。どしどつかずの態度は、結局お互いのためにならないんだから」

典子がたしなめる。

「わ、わかってるよ」

亮太はそれ以上何も言えない。

「でもさ、『アースガルド』って結構面白い所らしいじゃない?一度行つてみたいな」

再びテープルについてから、典子が言つた。

「へえ、『アースガルド』ってテーマパークかなんかな?」「…知らなかつたの?」「…マイナーなバンドかと思つた

「…」

典子の話によると、『アースガルド』というのは最近オープンしたばかりのテーマパークらしい。大手のゲーム会社が経営しているだけあって、ゲーム性の高い参加型のアトラクションが多く、その中でも特に迷宮探検ものの『竜のダンジョン』は人気があるそうだ。

「『竜のダンジョン』って言やあ、ロープレジyan。うちにもあつたろ」

亮太はテレビの側に置きっぱなしになつているゲーム機を見ながら言った。

「デートスポットにもいいんですつて。亮太、美雪を誘つてあげたら？」

さもおかしそうに、典子が言つ。亮太をからかつているのだ。

「うるへー」

ふぜん 慄然とした表情で亮太は答える。

（でも……誘つてあげたら、綾瀬さん、喜ぶかな…）

薄暗い地下迷宮。手に持つたランタン型の懐中電灯の頬りなげな灯りが揺れ、それにつれて壁に映つた亮太達の影も不気味に揺れていた。

「武内君、怖い…」

ぴつたりと寄り添つた美雪の身体がかすかにふるえているのが伝わつてくる。シャンプーの香りだらうか、甘い香りが亮太の鼻孔をくすぐつた。服越しに美雪の身体の温もりを感じる。

「大丈夫、俺がついてる」

励ますように、亮太は言つ。

「武内君…」

ふと気が付くと、美雪の縋るような目が亮太を見つめていた。

「あ、綾瀬さん…」

二人の唇の距離が近づいていく。

「亮太あ？ なーににやけてんの？」

呆れた様子の典子が茶々を入れた。

「な、何言つてんだよ」

はつと気が付いた亮太は、あわてて答える。

「変な想像してると、美雪に言つちやうやう」といふから、典子がニヤニヤしながら悪戯っぽく微笑み、亮太の頬を指でつついた。

「し、してねーつて」

その手を払いのけながら亮太は心中で美雪に謝つていた。

(ゴメン、綾瀬さん…)

「あつそ。ま、そういうことにしどきましょ」

全く信じていよいよではあるが、幸いにも典子はあまり深く追求してこなかつた。

ルルル…ルルル…

(…どこか遠くで電話が鳴つてゐる…)

重く沈み込んだ意識の中で亮太はぼんやりと思つた。

(あれ？ 変だな…どつかで聞いたことのあるよくな…)

頭の中で何かがしつこく警報を出しているようだったが、なかなかそれが形となつてこない。もやもやとした不安感のようなものが次第に膨れ上がつていき…

亮太はがばつと跳ね起きて受話器を取つた。

「は、はい、もしもし。武内ですが」

我ながら眠そうな声だ。

「あ、亮太君？ 加藤ですけど。うちの典子、まだそっちにいるのかしら？」

聞き慣れた声が聞こえる。典子のお母さんだ。

食事を終えた後、二人は勉強を始めたのだが（ただでさえ勉強などするはずのない亮太に典子が半ば強制的にやらせたのではあるが）、どうやらその途中で眠つてしまつたらしく、時計を見るともう十時を回っていた。さつと数えてみても三時間は経つている。

「あ、今…」

亮太は典子がいた辺りに田をやる。案の定、典子もローテーブルに俯せになつていて、すやすやと安らかな寝息をたてている。

「寝てます。ちょっと待ってください」

電話を左肩と頭で挟んで亮太が典子を起こさうとするが、おばさんが止めた。

「寝てるの？ だつたら悪いんだけど、もう遅いから今晚は泊まらせてもやつてくれない？ どうせ明日は休みでしょ？」

「はあ、構いませんよ。…はい、それじゃ」

話を終え、受話器を置くと、再び典子に田を向けた。典子は相変わらず静かな寝息をたてており、どうやら完全に寝入ってしまったいるらしい。

瞬間、典子の寝顔がとても愛おしく見え、亮太はドキリとした。

(…な、何だろ… 一体…)

突然の感情に自分自身で戸惑う。

(と、とにかく、こんな所で寝てたら風邪ひっちゃうよな…)

亮太は何故か触つてはいけないような気がしてちょっと躊躇つたが、意を決するとそつと典子の肩に手をやり軽く振り起こす。

「起きろよ。そんなところで寝てたら風邪ひくだろ。俺のベット貸してやるから、そっちへ行けよ」

「んー」

意味不明の声を発しながら典子は眠そうこむくりと起きあがる。目はほとんど閉じられたままでも、まだ寝ぼけているようだ。

「ほら、ベットに行けつて。つたく、世話のかかる…」

亮太は半ば眠っている典子の手を取つて、ベットまで行かせた。

典子はベットの端にちょこんと腰掛けたまま、ぼんやりとしている。

「ぼけつとしてないでさつさと寝ろよ。眠いんだろ？」

典子の隣に腰掛け、亮太は促す。

「…亮太あ…」

相変わらず眠そうな声で典子が言い、亮太の方に寄りかかってきた

た。ふわりと甘い髪の香りが漂い、間近に見えた白いうなじに亮太は驚き、田を逸らす。

「な、何だよっ！？」

声がうわずつてしまっている。

「幼稚園のお泊まり会の時さあ、亮太つてば家に帰りたいって泣き出して…」

全く、何を言い出すかと思えば、亮太は少し落ち着きを取り戻した。

「どうしてそんなつまんない事覚えてるんだよ」

「へへ…あたし、亮太の事だつたらなーんでも覚えてるもん…」

そう言つた典子の声が何だか悲しげに聞こえ、亮太はぎょっとして典子の方を見た。

「典子？」

亮太の位置からでは俯いた典子の表情は伺えない。

「典子…」

言いかけて、亮太は口をつぐんだ。

典子は眠っていたのだ。

（ぱーか。つまんない事ばっか覚えてやがつて…）

亮太は典子をベットに寝かせると、そつと布団を掛けた。

（…さて、俺も寝るか）

クローゼットから毛布を取り出ると、電気を消し、絨毯じゅうたんの上に口

口りと横になる。

（…いい匂いだったな…典子…綾瀬さんとはまた違つた匂いだけど…）

真つ暗闇の中で、亮太はぼんやりと以前嗅いだ美雪の髪の香りを思い出す。そして、先ほどの典子の香りを思い出し、またちょっとドキリとした。一緒に典子の白いうなじを思い出してしまったのだ。（でも何でだろ…典子にドキドキ…する…のつて…）

暫くの間はそんな事を考えていた亮太だが、いつの間にか眠ってしまった。

数日後。

亮太は今、バイト中だ。だがそれももうすぐ終わる。亮太は首をコキコキと鳴らした。

亮太のバイト先である、ファミレス、「ジョックス」はいつも賑わっている。そのせいなのか、それとも試験中暫く休んでいて一週間ぶりに仕事をしたせいなのかは分からないが、今日はいつもより余計に疲れたような気がしていた。

「それじゃ、お先に失礼します」

「お疲れさま」

「お疲れ」

勤務時間が過ぎ、亮太が挨拶すると、あちこちから返事が返ってくる。

午後七時台のピークは過ぎたとはいえ、広い店内のあちこちで店員がまだ忙しそうに動き回つており、厨房の中も騒がしい。亮太がほつとした気分でネクタイを緩めながら更衣室に向かうと、女子更衣室からちょうど加奈が出てきた所だった。加奈もこれから帰るらしい。

「あ、亮太君、今終わったの？ ちょうどいいわ、話があるんだけど」

加奈は何やら意味ありげな笑顔を浮かべている。

「何？」

「いいから着替えてきて。待ってるから」

加奈に押されるようにして亮太は更衣室に入つた。

(…つたく、何だよ。妙な顔しやがつて…)

ネクタイを乱暴に外しながら思う。

(…もしかして…デートしてくれ、とか言つんじや…)

亮太の手が一瞬止まつた。

「…んなわけねーか。ばっかみてー」

虚しさを覚えつつ、着替えを終えると亮太は廊下に出た。

「話つて何や」

「ここに、『アースガルド』のフリーパスがあるんだけど……」

加奈は手に持ったトートバッグからそつとチケットを一枚取り出す。

(ま、まさか、ホントに……!?)

焦つた亮太は思わず後ずさりをしてしまつ。もし誘われたらちやんと断りきれるのだろうか……。

亮太にはその自信がなかつた。

「実はこれ、買つて欲しいのよ」

「は?」

どういう事なのか、突然の事態にパニックを起こしている亮太の頭ではすぐには理解できない。

「今なら一枚で七千八百円の所を、六千円でいいわ。さあ、買つた買つた」

にこやかな笑顔を浮かべた加奈は押しの一手で亮太に迫る。

「つて、どーして俺が? しかも一枚も。いらねーよ。第一俺、一緒に行つてくれる奴なんていないし」

言いながら亮太は少しほつとしていた。

(ばかばか、ちょーしにのるんじゃないぞ)
そう自分を戒める。

「またまたつ。この間仲良さそーにしてた娘がいるじゃない。ね、ね、たまにはこーいう所にでも連れて行つてあげればさ、彼女も喜ぶ事間違いなし!」

「はあ?」

始めは何の事だかよくわからなかつたが、どうやら加奈は典子の事を亮太の恋人だと思っているらしい。ひどい誤解だ。

「あのな、あいつはただの幼なじみだぜ」

「照れちゃつて。どう見たつて『ただの』って風じやなかつたじやない。仲良く買い物なんかしかやつてさ。恋人つて言つより、そうね、まるで、夫婦みたい」

楽しそうに笑いながら加奈は亮太をつづく。

「だから~」

「んーん、い・い・の・よう、わかつてゐるって。『』のみんなには内緒にしてあげるからあ

亮太の言つてることを全く信じていないらしい。ほんほん、と亮太の肩を叩きながら訳知り顔の加奈は言つ。亮太はこの間の加奈の笑顔の意味が今やつと理解できた。

「ひょつとして、俺の言つてること全つ然信じてないだろ」

「うん!」

加奈は力いっぱいなずいてみせる。亮太はどうと疲れが押し寄せてくるのを感じた。

「もういい。でも、どうせ持つてるんだったら誰かと行きやいいじゃん」

「ばつかねえ、こんな所は一人で行つたつてつまんないでしょ。それに対し、明後日はバイトが入つてるの。これ、明後日限りのチケットだから

「へえ、使える日が限られてるの?」

「あたしもよく知らないんだけど、何でも定員が決まつてるらしいわ」

「そんなに混むの?」

「チケットで入場制限してるから中はそういうみたい。ね、お願ひ、買ってよ亮太君」

手を合わせ、すがるように加奈は言つ。今度は泣き落とした。

「あたしの友達がね、もらつたんだけど使い途無いからつて言ってきて、それで、あたしも『まかせなさい』つて言つちやつたもんだから、今更引つ込みつかないのよ」

「い、いらないよ…俺は…」

亮太はこういうのは苦手だ。こんな時は、自分が優柔不斷だとつづく感じてしまう。

「そんな事言わずに。ね?」

亮太のそういう性格を知つてか知らずか、加奈はしつこく頼みつづける。

『美雪でも誘えば?』

亮太の頭に、突如としてこの前典子が冗談めかして言つた言葉が閃く。

(…そろいえば、デートにもいって言つてたっけ…)

「亮太君? …何だったら、分割払いでも良いけど?」

黙り込んでしまった亮太に、加奈が不安そうに声をかけた。

「…いくらだつて?」

結局、亮太はチケットを買う事にした。

それから一日後、私立藤ヶ谷高校の女子更衣室では、部活を終えたばかりの綾瀬美雪がいた。普段は土曜日にはこんなに遅くまで部活はないのだが、大会が近いので特別に練習が長引いているのだ。

「ふう…」

長い、腰までとどく髪を邪魔にならないように束ねていたゴムを外し、軽く手ぐしで整え、ほつと一息ついた。美雪はテニス部内でレギュラーに選ばれているため、練習もなかなか厳しい。

着替えを終え、荷物をまとめるに、他の人たちに挨拶をして更衣室を出る。夕日を見ながら渡り廊下をゆっくりと歩いていると、挨拶をしながら後輩達が追い抜いていく。早めにバス停に行って、バスで座ろうというのだろう。

「お先に失礼します」

「つつれいしまーす…あれ、綾瀬先輩、加藤先輩と一緒にじゃないんですか?」

後輩の一人が立ち止まって尋ねた。

「あ、典ちゃんは今日は用があるんだつて。少し早く帰ったのよ
それから少しとりとめのない話をした後、「お先に失礼します」と言って走つていく後輩を見ながら、美雪は何とも言い様のない寂しさを感じた。典子は、おそらく亮太の所にご飯を作りに行つたの

だろう。部活を早退した時の心ここにあらずといった典子の様子を見ればすぐにわかる。典子もレギュラー部員の一人なのでそうしおつちゅう部活を早退したりできる身分ではないのだが、それだけ亮太のために料理を作るというのが大切なのである。

美雪の方はといえば、亮太とはこの前駅に送つてもうつて以来、相変わらず口クに言葉も交わしていないような毎日だ。何だか避けられているような気さえしている。

（…やつぱり、あの事を怒っているのかな…）

もちろん、あの事というのは亮太の頭にテニスボールを当ててしまつた一件だ。しかも、その後亮太に自転車で駅まで送つてもうつたのだ。

（…やつぱり、図々しかつたよね…）

今更ながらに亮太と一緒にいたいという誘惑に負けて送つてもらつてしまつた自分自身に嫌気がさしていく。

しかも、自分がいつも亮太と一緒にいる典子に嫉妬までしているのがわかつた。

（…バカ…そんなんじや、典ちゃんの親友の資格なんてないわ…）

めいつぱい落ち込みながらとぼと歩いていくと、下駄箱の所に誰かが座つているのが見えた。

（…っ！ た、武内君つ！？）

亮太は下駄箱の所のスノコに座り、手に持つた何かを見つめてぶつぶつと言つている。美雪にはまだ気が付いていないようだ。美雪は何故か足音を忍ばせてしまう。

（…何を持つているのかしら…）

美雪は後ろからそつと見つめた。

（今日も言えなかつた…）

亮太は落ち込んでいた。加奈からチケットを買ってから一日。何度もなくチャレンジしてはみたのだが、そのたびに邪魔が入つたり、結局言えずに適当な挨拶でごまかしてしまつたりしていた。

（…どうして言えないんだろ…）

他の女の子達とは普通に話もできる。だが、どうして美雪が相手となるとぎくしゃくとしてしまつのだろ？。

「…よしつ！ 明日こなはつ！」

立ち上がり、チケットをぐっと握りしめて亮太は心に誓つた。

「きやつ！」

すぐ後ろで、悲鳴が聞こえた。

「はいっ！？」

心臓が鼓動を一回飛ばした。振り返ると、そこには、美雪が立っている。

（…え、ギーして…あ、そ、そーか、部活があつたんだもんな…）

部活の後の疲労からか、わずかに倦怠感のようなものを漂わせる物憂げな美雪の表情についつい目がいつてしまつ。

（チャンスだ！ 他には誰もない）

亮太の中の誰かが、不意にそう囁いた。

（ええっ！？ で、でも…）

（今を逃したら、きっともう機会はないぞ？）

「それでもいいのか？」といつ意味を言外に漂わせ、それは言つた。

（…）

（どうした？ 言わないのか？）

黙つたままの亮太に畳みかけるようにして尋ねる。

（…今を逃したら…）

亮太は、ごくりとつばを飲み込んだ。

「あああのつ」

「い、ごめんなさいつ」

一人の声が重なつた。はつと気が付いて一人とも黙つて俯いてしまつ。

「あ、ど、どうぞ」

亮太が言つ。

「あ、いえっ、べ、別にのぞくつもつはなくつて…」「めんなさいっ」

美雪は真っ赤になりながら深々と頭を下げて謝る。

何の事だろう。亮太は困惑した。だが

(チヤンスだ! 今、言わなくつちやー)

「あ、あのつ。綾瀬さんつ」

亮太はなるべく自然に声をかけよつとした。だが、そう意識すればするほどガチガチになつてしまつ。

「は、はいっ! ?」

美雪も何か緊張しているようで、背筋を伸ばして身構えた。

「え、えつと…」「」「アースガルド』のフリーパスがあるんだけど… よ、良かつたら明日、い、行かな…きませんか?」

亮太はチケットを見せながら言つ。チケットは握りしめたためかしわくちゃになつてゐる。いきなりの事に、美雪は驚いたよつだ。

「あ、明日?」

「う、うん。い、いやあ、実はバイト仲間に無理矢理買わされちゃつて。売つぱらおうにも眞吾の奴は女の子に呼ばれてどつか行つちやうし、典子も…」

聞かれてもいないのに亮太は照れ隠しにペラペラとじしゃべる。

(典子…)

誘われて嬉しかつたが、亮太がそう言つのを聞いて美雪は胸が痛んだ。それに、明日は別の用があるのだ。

「…」「はじめんなさい、武内君…来週じゃダメかしり?」

残念そうに美雪が答える。

「…」「これ、明日の曜日限定つて奴でさ、他の日はダメらしいんだ…」

フリーパスを所在なげに見ながら亮太が言つ。

「…そ、そうなの…ごめんなさい、せつかく誘つてくれたのに…

明日は約束があつて…」

美雪は悲しげに俯いてしまつた。今にも泣き出しちまう

見えて、亮太は慌てる。

「そ、そんなに気にしないでよ。ここには眞吾にでも売つ払えばいいんだし」

どうしていいのか分からず、亮太は明るくやうやく事しかできなかつた。そして、その場の雰囲気に耐えられなくなつて、美雪に挨拶するとそそくさとその場を離れた。

(…昔から…一緒なんだものね…)

亮太と別れた後、バス停に向かいながら美雪はそう思つた。
(きっと、典ちゃんは私の知らない武内君のことをいつぱい知つてて…)

(…典ちゃんは、やつぱり武内君の事を…?)

訊いてみたいと美雪は思つた。でも、何だか怖いような気がした。
(そして…武内君…は…?)

「センパイ！まだそんな所にいらっしゃったんですかっ！？」
早くしないと、バスなくなつちゃいますよっ！」

「え？あ、ホントだ…！」

後から駆けてきた後輩に促され、美雪も慌ててバス停に急いだ。

家に帰ると、亮太は悪友の眞吾に電話した。おそらく寝ていたのだろう、電話に出た眞吾の声はひどく眠そうだ。さすがに、昼寝が趣味と堂々と言つてのけるだけの事はある。

亮太がフリー・パスのことを話すと、

「明日あ？ダメダメ。明日は出掛けんだよ。それにな亮太、
眠そうな声のまま眞吾は続ける。

「何だよ」

「『アースガルド』って言やあ、今流行の『テートスピット』じゃねーか」

「お前だつたら行つてくれる相手ぐらいいぐらでもいるだろ」

亮太は多少のやつかみも込めて言つた。

「やなこつた。そんな所に行つたら金がかかる。それに、そんな

所、恋人同士で行く所だろ。相手に妙な誤解をされかねん」

真吾はそのルックスのせいいか女の子にやたらにモテるのだが、どうしてか本気で女の子と付き合つたりしようとはしない。もつとも、ショッちゅう色々な相手と会つたりしてはいるようではあるが。

「ちつ。しょうがねえ、典子でも誘つてみるとすつか」

「…亮太？」

急にまじめな声になつて真吾が言つ。

「な、何だよ」

「典子と綾瀬の二股かあー？ やるなー、色男」

からかうような声で真吾が続けた。

「なつ何言つて…つて、どうしてお前が綾瀬さんの事をつ！？」

亮太は顔が赤くなるのを感じた。電話なのが幸いだ。

「バレバレだよ、お前。何年一緒にいると思つてるんだ。それよ

り…」

「何だよ。今度変な事言つたら切るぞ」

真吾と話していると、いきなり何を言われるか分からぬ。自然と、亮太は身構えてしまつ。

「典子だつて、女の子なんだぜ」

「はあ？ あ、当つたり前だろ。何言つてんだよ、今更」

いきなり当つたり前のことを言い出すので、肩すかしを食らつた気分になつた。

「んー、典子にいつもいじめられてるんで、典子の事女の子つて見てないんじゃないかと思つた」

「知らねえぞ、そんな事言つてると」

亮太はあきらめ、話を切り上げた。

（あの野郎、訳わからんねー事言いやがつて…）

亮太が受話器を置くと、すぐにチャイムが鳴つた。ドアを開けると、いい香りがふわっと漂う。見ると、細身の焦げ茶のズボンにゅつたりとした茶色のボーダーのTシャツ姿の典子が立つていた。髪が少し濡れていて、どうやらシャワーを浴びてからこっちにきたら

しい。頬がほんのりと赤く上氣していた。

(どうしていちいちシャワーなんか…)

亮太は思つ。

「亮太、買い物に行くわよ」

最近の典子は何故かやたらと気合いが入つてゐる。この頃毎日の
よつに来て料理を作るのだ。どつやら、この前の失敗の雪辱を晴ら
すつもりらしいが、一体何回雪辱を晴らせば気が済むのであらう。

「典子、明日、部活があるか?」

亮太は尋ねる。美雪の用事が部活であつたら当然典子も行けない
からだ。

「明日? 別にないけど。何で?」

典子が聞き返す。

(部活じゃないのか…)

そう思つた亮太の頭に、突如として柳井の顔が浮かんだ。柳井と
いつのは美雪と仲のいい秀才で、亮太は嫌いだつたがこいつも女
の間では人気が高い。なお悪い事には美雪と柳井が付き合つてい
るという噂もまことしやかに流れているという事だ。誰もその真偽
を確認した者はまだないようだつたが、『組の誰々が告白して
綾瀬に断られた』という話が出る度にその事が囁かれ、みんな溜め
息をついているのだ。

(そういうえば、美雪ちゃん、約束つて言つてなかつたつけ…まさ
か…)

「亮太?」

腕組みをして考え込んでいる様子の亮太に典子が不思議そうに尋
ねる。

「い、いや、何でもない。それより、『アースガルド』のフリー
バスが一枚あるんだけどさ、明日、行かないか」

まともに言うと何となく照れ臭いので亮太はわざと軽い調子で言
う。だが、亮太は漠然とではあるが戸惑いを感じていた。照れ臭い
なんて、今まで全く感じたことなかつたのだ。

「はあ？」

いきなりの事に、典子は驚いた様子だ。

「…どうしちゃったわけ？ 急に。何か悪いものでも食べた？」

「何だよそりや、ひどい方だな」

仏頂面で亮太は答える。

「どうせ行くなら、あたしより美雪を誘えばいいじゃない。あ、何だつたら、あたしから話してあげよつか？」

典子が悪戯っぽく微笑みながら言った。

「もう誘つたよ」

からかわれてムツときた亮太はふきりぼうに答える。

「へえ、そうなの？」

ちょっと驚いたように典子が言つ。亮太にはそんな事は出来つこないとも思つていたのだろうか。

「そうじやなきやお前なんか誘うかよ」

仕返しとばかりに亮太は憎まれ口を叩いた。

「悪うございました。他に相手がないからあたしつて詫ね。でもちろん、亮太のおごりでしょ？」

イジワルく微笑みながら典子が言つ。

「何言つて…」

そこまで言つた時、ふと亮太の脳裏にこの前の疲れて眠つてしまつた典子の姿が浮かんだ。

「…どしたの？ 亮太。別に、おごりじゃなくつていいけど」

途中で口をつぐんでしまつた亮太に、典子が尋ねる。

「…いーよ。たまには。いつも飯作つたりしてもらつてるからな」

「ホントに？ 熱もあるんじゃない？」

意外そうな顔をして典子が言い、亮太のおでこに手を当てる。

「どーいう意味だよ」

亮太は典子を睨んだ。

「いーえ。何でもありません。じゃ、明日のお弁当の分も今日のうちに買つとかなきや。亮太、買い物に行くわよ！」

張り切つて腕まくりしながら典子が言った。

翌日は幸いな事によく晴れていた。珍しく寝坊をせずに済んだ亮太は、待ち合わせの時間より少し早く典子の家に着くことが出来た。典子はまだ支度をしているらしい。亮太は外で待っているあいだ、ミルクとじやっていた。ミルクというのは昔、典子と亮太が拾ってきた犬の子供で、スピツツか何かの雑種だ。家の中では時折バタバタという足音と、典子が何か大声で叫んでいる声が聞こえている。あわただしく支度をしているらしい。

亮太はふつと顔を上げてひつそりと静まり返つている隣の家を見た。そこは元の亮太の家だが、今は叔父夫婦が住んでいる。

(昔とちつとも変わらないや…)

ここから窓が見える、その部屋に中学生の終わりまで亮太は住んでいた。

「うわっ」

物思いに沈んでいた亮太の頬をミルクがなめた。構つてくれとう抗議のようだ。

「つとにもう。典子つたら。『ごめんなさいね、亮太君。待たせちゃって。あれでもあの子、朝の四時からお弁当作つたりしてたんだけど。何だか服が決まらないらしくって』

典子のお母さんが出てきて言う。

「いや、こっちもいつも待たせてばっかりですから
(へえ、服が決まらないなんて女の子みたい…)

そこまで来て、亮太は気がついた。

(あ。あいつ、女の子じゃねーか。なに考えてんだ、俺…)

こんな事を本人の前で言つたら殺されかねない。

「それにしても、亮太君、典子の事デートに誘うなんて、その気になつてくれたのね。おばさん嬉しいわっ」

亮太は顔がひきつるのを感じた。

「…デ、デート…」

典子のお母さんは亮太が典子をもじってやつてくれたらいいのだと常々言っているのだ。

（でも、普通は「これ、デートになるのかな…」）

亮太はふと思つた。昔から、典子とは色々な所に遊びに行つたものだ。今まで、それを“デートだと意識したことなどはなかつた。

「お母さんっ！ またそういう事言つてっ！」

典子が怒つたような声で言いながら玄関から出てきた。白地に青のギンガムチェックの入つたワンピースを着て、大きめのバスケットを手に持つている。

「何だかすごいカッコだな」

典子の服装を見て亮太が言つ。いつも家に来る時は制服かズボン系のスタイルが多かつたので、はつきり言つて典子が「こういう格好をしてくるとは想像だにしていなかつた。

「どうこう意味？」

馬鹿にされてると思ったのか、棘のある声で典子が聞き返す。

「…いや、何といつか…その…妙に女の子してるなつて」

何となく照れながら亮太はいい、ぽりぽりと鼻の頭をかく。

「ば、馬鹿、柄にもない事言わないでよ」

頬を赤らめながら典子が言つた。

「…馬子にも何たらつて奴か？」

そう続けると、亮太はバスケットで思いつきりひつぱたかれた。

「それでも随分混んでるな」

まだひりひりする頬を押さえながら、仏頂面で亮太が言つた。

『アースガルド』に着いた亮太達の目にまず飛び込んできたのは、あちこちにいるアベックらしき若い男女連れの姿だつた。みんな、仲が良さそうに寄り添つて歩いている。入口の発券機の所には、「本日分のチケットは完売しました」と書かれた札が下がつていた。どうやら、典子や真吾が言つていたように、ここは「デートスポット」として相当人気があるようだ。

「うわ…あっちもカップル、こっちもカップル…あたし達、やっぱ場違いなところに来ちゃったんじゃない？」

典子が気圧されたような声で言つ。

「し、知るかよ。とにかく行くぞ」

（これって、やっぱ、デートなのかな…）

いつもの典子が、すごく女の子っぽく見えてしまつ。亮太は何だかこそばゆいような気分になつて、ぶっきらぼうな態度をとつた。亮太は財布からフリー・パスを取り出すと、黙つて一枚を典子に渡す。そして、無言のままどんどん先に行つた。

「あ、待つてよ亮太、ひっぱたいたの、まだ怒つてるの？」

済まなそうな声で言いながら典子があわてて後を追う。

中に入ると、亮太達はまず正面にある『竜のダンジョン』の所を行つた。『竜のダンジョン』というのは、この『アースガルド』を運営しているゲーム会社の最大のヒット作で、主人公が勇者となつて地下深くに潜む古竜『ニーズホッグ』を倒し、世界に平和をもたらす、というRPGだ。

入場制限が成果を上げているのか、そう長くは待たないうちにすぐに入れた。

薄暗い迷宮。明かりといえば、手に持つたランタン型の懐中電灯の不規則に揺れる頼りなげな明かりと、所々にあるブラシクライトの紫色の光。そして、場違いな非常口を示す緑色の誘導灯だけだ。それらの明かりが、鏡で出来ていて壁に反射している。しかも、両側の壁が鏡であるために合わせ鏡となつて、まるでその奥に無限の空間がつづいているかのように映つていて。ブラックライトの側を通る度に一人の服が不気味に輝いた。

「どうしてダンジョンなのに壁が鏡で出来てるんだ？」

「知らないわよ」

一人はしばらく無言で歩いていたが、やがて、

「きやつー！」

典子が悲鳴を上げる。

「どうしたつ！」

「り、亮太、あ、あれ！」

典子は天井を見ないよう下に向いて目をしつかりとつぶり、ふるえる手で天井を指さしながらへたりこんでしまった。

「…？」

天井にはホログラムで金色に輝くゴキブリの化け物のよつなモンスターがいた。

「クソ、当たんないぞ！」

亮太は剣の形をした光線銃で天井のセンサーを攻撃するが、ホログラムのゴキブリと共に移動しているためなかなか当たらない。その間にも、何度も亮太はゴキブリからの攻撃を受けていた。

「典子、なに座つてんだよ…！」

「だつて…」

泣きそうな声で典子が答える。

熱くなっていたので亮太は忘れていたが、典子はゴキブリが大の苦手だったのだ。

「うーつ！ 当たれーつ！！」

亮太は躍起になつて光線銃を撃ちまくつた。

突然、ホログラムのゴキブリが悲鳴とともに消えた。

「もつとよく狙つて。それから移動する範囲は一定だから、追つ

かけるより先読みしてセンサーをねらつた方がいいよ」

よく通る男の声が聞こえる。亮太が天井から通路のほうに目をやると、カッブルが通路の奥からこつちにやつてくるところだった。亮太達よりもうちょっと年上だらうか。どうやら、この人達に助けられたらしい。

「でも、合格ね。ちゃんと彼女をモンスターの攻撃からかばつてあげたんだから」

亮太が男の人からレクチャーを受けているあいだに、そちらの方をちらつと見てから女人が典子に向かつてささやくように言つ。

(え…亮太…?)

典子の胸にじんと熱いものがこみ上げてくる。同時に、顔が熱くなつていった。

「じゃ、がんばって」

そう言つとそのカップルは行つてしまつ。

「大丈夫かよ、典子」

典子がいつまでもぼーっとしたままなので、心配になつて亮太は声を掛けた。

「…う、うん。でもどーしてゴキブリ型のモンスターなんか出てくるのよ」

平静を装いながら、典子は答える。だが、実際は心臓がドキドキいつているのを感じ、焦つていた。

「苦手な人が多いからだる。さ、行こりゃせ」

何事もなかつたように亮太が言い、歩き出す。もつとも、亮太には最初つかかばうつもりなどなく、たまたまそういう位置にいただけだったのだろうが…。

(ありがと、亮太…)

「典子?」

立ち止まつたままの典子に亮太が声を掛ける。

「え? あ、ごめん。ちょっとぼーとしちゃつて」

あわてて典子が答える。

「変な奴」

「何か言つた?」

拳を握り、わざと見せるようにしながらこやかな笑顔で典子が訊く。

「い、いや。何でもない」

亮太が答え、二人はまた歩き始めた。

「クソ。やっぱりニーズホッグを倒せなかつたな。得点順で見て
も最下位に近いぜ」

『龍のダンジョン』から出てから、亮太は悔しそうに言つ。

「亮太が下手だからでしょ」

微笑みながら典子が憎まれ口を叩く。

「言つたな。今度はあるのゴキブリ、お前が倒せよな

仏頂面で亮太が切り返す。

「やだーっ。それならあたし、外で待つてるもん」

「ちえっ。下手だの何だの言つてるくせに…で、次はどう行く?..」

地図を広げながら亮太は言つ。

「…んーとね、今度は…」

典子が地図をのぞき込んだ。

「待つた。腹が減つた。飯にしようぜ」

来てからまだ一つのアトラクションにしか行つてないが、時計を見るともう既に十一時を回つている。

「…もう。わがままなんだから。でも、今回は亮太に賛成。あたしも、おなかペこペこよ」

典子がしようがないなあという表情で笑いながら答えた。

「よつしゃ、決まりだな。じゃ、どうか飯食えるといろいと…」

亮太は地図をのぞき込んだ。

アースガルドには一面に芝生が植えられた結構広い場所があり、そこでお弁当などが食べられるようになつていて。そこは所々に広葉樹が涼しげな木陰を作つていて、あちこちでカッブルが仲むつまじくお弁当を広げていた。

「参つたな、ビニールシートか何か持つてくりやよかつた」

亮太が言つと、典子が得意げに、

「まつかせなさい。ちゃんど、用意してあるんだから」

と言いながらバスケットから小ぢやめのビニールシートを取り出した。

「さつすが。ただ口やかましいだけじゃないんだな。見直したぜ

「口やかましいだけ余計でしょ」

そう言いながら典子は亮太を小突く。

適当なところに場所を決めると、亮太達は典子の作つてきたお弁当を食べ始めた。

「ね、亮太、どう?」

やつぱり典子は自分の料理の出来が気になるらしい。典子は亮太がお弁当のサンドイッチを頬ばるのをじつと見つめている。

「ふん。ふまいひよ（うん。うまいよ）」

亮太は右手で円を作つて見せた。

「そ。良かつた」

やつと典子も安心してサンドイッチを食べ始める。

青い空、白い雲。

もう田差しの中にはわずかではあるが夏の気配が感じられる。芝生の所々に生えていたるあまり背の高くない草を揺らしながら吹き渡る風が心地よい。アトラクションなどからの騒がしい歓声もここに来ると微かに届く程度になつており、さらに広場の周囲に配された広葉樹がアトラクションの建物を巧みに隠していた。

（昔、亮太と初めて遠足に行つた時もこんな感じだつたわね…）

ぼんやりと周りの景色を眺めていた典子は、ふと昔を思いだした。まだ、一人が幼稚園に通つていた頃。一人は家の近くの原っぱに、幼稚園の遠足をまねて一人だけで『遠足』に出かけたのだ。

（…あの頃、あたし、まだ料理が下手で…）

母親の真似をして『お弁当もどき』を作つた典子だったが、結果は散々。それでも、亮太は

「おいしいよ」

と言つて残さず食べ…翌日、お腹をこわして寝込んだのだった。

「ごめん、ごめんね、亮太」

布団に寝かされた亮太に、幼稚園の制服姿の典子がすがりついて泣きじやぐる。

「…泣くなよ典子。典子は悪くないよ…」

亮太が、苦しそうに、しかし慰めるように言つて、手をさしのべる。

「…だつて、典子は一生懸命作つてくれたんだもの…」

うなされながら、亮太が呟く。

「亮太、死んじゃダメ！ 亮太あ！！ お嫁さんになつてあげるからっ！」

典子は差し出された亮太の手に縋りつく。

「…？ オヨメサンつて、なに…？」

「お母さんみたいに、いつも一緒にいてお料理とか作ってくれる人の事つ！ ね、亮太、典子、もつともつとお料理上手になつて、もうおながが痛くならないようにするからっ！！ 死んじゃダメだよッ！ 亮太つ！！」

きょとんとした表情のまま、それでもこいつくりと亮太は頷く。

「…でも、変なの。今だつて、いつも一緒にやん…」

何だか納得がいかないような声で、亮太が言つた。

「お嫁さんは違うのつ！ もつとずつと一緒にいて、とってもつても大切な人の事なのつ…！」

「…ふうん…」

まだ納得がいかないような顔をしていたが、亮太は続けた。

「…典子ならいいな。僕、典子の事好きだから…」

風が、木々の間を吹き渡り、かすかに葉をならした。

「…ね、亮太」

昔の事を覚えているかと訊きたくなつて、典子は尋ねる。

「ん？」

亮太が典子の方を向いた。

『俺、典子の事好きだから…』

こっちを向いた亮太の顔にその台詞が重なり、はつとした典子はあわてて目を逸らす。

「…う、ううん、何でもないつ

「何だよ？ 気になるじやん」

典子の顔をのぞき込むようにして亮太が尋ねる。

「つ、次、どこにしようかって、そ、それだけ」

話を逸らすように典子が言った。

「そうだな…何処にしようか？」

考え込むように地図を見ながら亮太が呟く。

「…そ、そうだ、この、『ノルンの神殿』っていうのはどう?」

「『あなたの未来、お告げします』…お前、好きなの?」

「…」

呆れたように亮太は言つ。

「わるい?」

ちょっと首を傾げて、典子が挑みかかるよつた表情をする。

「いや。じゃ、ぼちぼち行くか」

亮太は立ち上がり大きく伸びをしながら言つた。

「ようこそ。運命を司る女神、ノルンの神殿へ。お名前をどうぞ」

「武内亮太」

「…たけうち…りょうた、さんですね。生年月日を西暦でお願いします」

ローマ時代の大理石で出来た神殿をイメージした白い建物の入口で登録を受け、丸い、水晶球を模したらしいプラスチックの玉を受け取る。そして、ひらひらの白い神官服のよつた衣装をまとつた女の係員に促され、奥に入った。そこは少し広い空間になつていて、何人かの人たちが既に待つてゐる。どうやら、ここは中についての説明をする所のようだ。

亮太達が入つて間もなく、係員が説明を始めた。

「皆様、ノルンの神殿へようこそ。今から、この神殿内での注意などについてご説明いたします…」

おなかいっぱい食べたせいだろうか、急に襲つてきた眠気と戦うのに必死で、この後続く説明を亮太はほとんど聞いていなかつた。

「ね、亮太、何を口づ?」

典子がはしゃいだ声で亮太に尋ねる。その声で夢の世界から現実へと引き戻された亮太は、

「うーん… とりあえずここに置きや いいのか？」

と眠そうな声で呟くと田の前にある祭壇の、男性用と書かれた台上に水晶球を置いた。係の人の説明によれば、確か奥にはこんな祭壇が三つあって、それぞれに水晶球（例の入口で受け取ったプラスチックの玉だが）を置いて質問に答えると後でどうにかなるとか言っていたようだが…。

「あ、馬鹿、そっちってカップル用じゃない。あたしとの相性を占うことになっちゃうわよ！」

あわてた声で典子が言うがもう間に合わない。祭壇に仕掛けられた橢円形に縁取られたモニターに女神（なのだりう、たぶん）があらわれて言う。

「よろしい。汝らの相性、占ってしんせよ。結果は祈りの間にて教えよう」

言うだけ言うと、モニターから女神の姿は消えてしまい、後には「先へ進め」の文字だけが浮かんでいる。どうやら、やり直しあきかないらしい。

「…もう。そそっかしいんだから」

典子が呆れたように言い、ふくれてみせる。

「あんなめんどくさい説明、いちいち覚えてられつかよ

モニターの指示通り、先へ進むしかなかつた。

「…最後の質問。親バカになると思う？」

三つめの祭壇にて。モニターに映った白いゆつたりとした服をまとつた女神が亮太に問いかけた。

「親バカ？ … イエス、かな」

亮太は祭壇にある「イエス」のボタンを押す。

「はい、お疲れさま。結果は、祈りの間でね

モニターの中の女神、と言つには少し若すぎるよつな気さえする女の子が軽い調子でそう言つと、ぱっと画面が切り替わり「先へ進め」の文字だけが映つている。亮太は水晶球を取ると、一足先に質

問を終えていた典子と共に祈りの間へ向かつた。

「きつと、『口やかましい女性です、最悪の相性でしづ』なんてのが出でくるぜ」

結果が出てくるのを待つあいだに亮太は憎まれ口を叩く。

「えーえそりでしづとも。あたしには、『だらしのない子供のよつな相手。さつさと別れた方がマシ』って書かれてると思つわ」

典子も負けじと言い返してきた。

「言つてろ」

そうこうしているうちに『運命の書』といつのが出てきた。結果はこれに書かれているらしい。明るい外に出た二人は、立ち止まってそれぞれの運命の書を読みふけつた。

『カトウノリコとの相性

汝のことを優しく包み込んでくれる女性だ。心優しい彼女は、汝の良きパートナーとなつて影に日向に、汝のことを支え、励ましてくれるであろう。そしてその優しさによつて汝は満たされ、よりその力を發揮できるであろう。時に汝がわがままな態度をとつてしまつても、いちいち腹を立てたりしないおおらかさを彼女は持つてゐる。一人が長年連れ添う可能性は高い。』

「はあ！？ 何だこりや！？」

亮太は思わず運命の書を取り落としてしまつた。一体、どうしたらこんな恥ずかしい結果が出てくるというのだろう。気になつた亮太は典子の方も見てみたくなつて、後ろからのぞくとす。だが、それに気づいた典子はあわてて隠してしまつた。

「どーして隠すんだよ

「バ、バカね、亮太のことクソミソに書いてあるから落ち込まないよにしてあげてるんじゃない」

慌てた様子の典子は真つ赤になつてそつと泣く。

「けつ。悪うござんしたよ。俺のはこんなコト書いてあんぜ」

亮太は運命の書をひらひらさせた。

「… 読んでいいの？」

おずおずと典子が尋ねる。

「どーぞ」かつてに

典子は亮太から運命の書を受け取ると読みふけった。そして、そのまま運命の書を見つめている。何だか様子がおかしい。

「おい、どーしたんだよ」

返事がない。

「典子？」

「え？ あ、あはははは、な、何でこう違うのかしらね。全く。当てにならないったら。つ、次行こ、次」

（一体どうしたんだ？ 典子は、何だかこっちを見るのを避けているような…。それに、顔も赤いし…まさか…）

亮太はすいと手を伸ばして典子の前髪をかき上げると、自分のおでこを典子のおでこにつける。

「なな、何？ 亮太」

典子は今まで以上に顔を赤くしてぱっと身を退いた。

「お前、何だか顔が赤いぞ、熱でもあんじやねーの？」

怪訝そうな表情で亮太は言う。

「バ、バッカねえ、な、何でもないわよ。ほら、それより地図地

図

「ちえつ。人がせつかく心配してやつてるのに、バカはねえだろ。つたく」

仏頂面でぶつぶつ言いながらも亮太は地図を取り出した。

「つ、次はどこにしようか？」

「そだな、次は…」

気が付くと、二人は肩が触れ合うぐらいの距離で並んで立つていた。ハツとした典子は、少し身体を離す。ちらりと亮太の方を見ると、亮太はそんな典子の様子にも気づかないまま、地図とにらめっこをしていた。

（いつもは何でもなかったのに…）

典子は、今は亮太にあまり近づいてはいけないような気がしている。

た。しかし、それ以上に強く、ずっと側にいたいと思つていた。

(ダメ…亮太は美雪のことが…あたし達、ただの幼なじみ…)

典子はいつもの呪文を繰り返す。だが、もつ今はほとんど効き目がなかつた。

(どうして？ こんな、占いの結果が嬉しいなんて。あんな、あんなわがままな亮太なんか…)

『タケウチ リョウタとの相性

かなりわがままで子供っぽく振る舞つてはいるが、本当の彼は内氣で、傷つきやすい心の持ち主。そのため、子供っぽい意地を張つたり、時には空威張りをしたりする。だが汝は、汝自身のその優しく思いやりのある性格を發揮して、おおらかな気持ちで接する事ができるであろう。そしてそれに彼が気づいた時、彼も心を開き、本来の優しさを發揮して汝を守つてくれるであろう。汝はその優しさに満たされ、一人は以心伝心、言葉がなくても心が通じ合つことができ、長く寄り添つていけるであろう。

嬉しかつた。嘘でもいいから、信じたかつた。

(亮太が、振り向いてくれたら…)

それが美雪に対する背信行為になるとわかつてはいても、もはや典子は流されていく自分の心をどどめる術を知らない。

(…美雪は亮太の事、どう思つてるの…？)

亮太の美雪に対する想いを知つて以来、典子は何度となく美雪にそう尋ねたいと思う事があつた。美雪にその気がなければ…。とう期待だ。そして、そう期待する自分に何度も自己嫌悪を感じている。

(…亮太の側にいる資格なんて、ないわよね…)

暗く沈んだ心で、典子は自嘲気味に思つ。

典子はまだ地図とにらめっこをしている亮太をぼんやりと眺め、そして、思つた。

(亮太が好きになつた人が、せめてもつと他の誰かだつたら良かつたのに…)

と。

「…でいい？ 典子」

「え？ あ、う、うん」

いきなりのことに典子は適当な返事をする。そんな典子の様子に亮太は不安を感じた。

「お前、ほんとに大丈夫か？ 具合悪いなら、帰るぞ」

「へ、平氣だつて。ちょっとぼーつとしてただけ。さ、亮太、行

こ」

典子はあわてて亮太を促す。

「お、おう。じゃ、また『竜のダンジョン』な

「えーつまたゴキブリい？」

「なーんだよ、お前、今いいつて言つたじゃねーか

「そ、そだつけ。じ、じゃ行こつ」

「…つとて大丈夫なんだろうな、お前…」

典子に引っ張られるようにして、ぶつぶつ呴く亮太は竜のダンジョンへ向かつた。

結局、二人は午後十時三十分の閉園時間ぎりぎりまでめいっぴい楽しんだ。典子がやたらとはしゃいでいたのだ。

帰りの電車は時間が時間だけにガラガラだ。亮太と典子は並んで座つた。

「疲れたー。どーして二ーゼホッグが倒せないんだよ」

どさつと乱暴に席に座りながら亮太が言う。

「亮太が下手だからじゃない？」

典子が憎まれ口を叩く。何だか少し眠そうだ。まあ、あれだけはしゃげば疲れるのも当たり前だろうが。

「けつ」

亮太はそれ以上、返す言葉がなかつた。

「ねえ、亮太」

あらためて典子が言つ。

「何だよ」

「ホントに、今日はおじりでいいの？」

「……いって言つてんだる。いつも飯作ってくれてるお礼だよ」少し格好をつけて、亮太は言った。

「……ありがと」

ややあって、小声でそう言つた典子の声が妙にかわいらしく聞こえて亮太はあわてる。

「な、何だよ、気持ち悪いな、自分でおじれつて言つたんじゃんか」

「そ、そだね」

沈黙が流れた。ガタン「トーン」という規則正しい電車の走る音だけが、車内に響く。

「考えてみると、久しぶりだよな、一人で遊びに行つたのって。この前が……いつだっけ？」

沈黙を破るようにわざと明るい声で天井を見ながら亮太が言ひつ。「ああ……忘れちゃった」

ぼんやりと眠そうに典子が答える。その手からバスケットが落ちそうになつた。亮太はあわててそれを受け止める。そして、それをしげしげと眺めていたが、やがてぼそりと言つた。

「昔に比べりや、典子の料理も進歩したもんだよな。幼稚園の頃は、どんでもないもん食わされて腹痛起こして死ぬかと思つたぞ」

「亮太！？」

典子はハツとして思わずそう言つていた。亮太が怪訝そうな顔をする。

「な、何だよ」

「う、ううん、何でもない。そんな昔の事、よく覚えてるわね」

そう言いながら、典子は、『あの時の約束、覚えているの……？』と訊きたくてしようがない自分を感じていた。

「お前の方がよっぽど昔の事覚えてるよ……」

亮太は思わずそう呟く。

「え？」

「あ？ い、いや、何でもない」

典子に聞き返されてハツとした亮太は誤魔化した。例のうなじの件が頭をよぎり、後ろめたい気分になつたのだ。

「…？」

今度は典子が怪訝けげんそうな顔をする。この前の事は典子は寝ぼけていて覚えていないのだろう。

再び、沈黙が流れだ。

「亮太…」

しばらくしてから、典子が寄りかかつってきた。この前と同じ、甘い香りがした。再びこの前の事を思い出して亮太はちょっとドキドキしてしまう。

「ななな、何だよ、いきなり」

典子の方を見ると、典子はすやすやすと眠っていた。亮太、と言つたのは寝言だつたらしい。

(…またか。つたぐ、いじつは…)

亮太が呆れていると、典子が何か呟いた。亮太はよく聞こえるよう耳を近づける。

「ダメじゃない、人参もちゃんと食べなきや…」

一体どういう夢を見ているのだろう。典子はそう呟きながらクスリと笑つていた。その笑顔が、何だかとてもかわいらしく見える。(そういえば、典子、好きな男とかいるのかな…)

ふと、亮太はそんな事を思う。

今までそんなん事を考えた事など全然なかつた。ずっと一緒にいたからだ。自分じゃない別の男の隣にいる典子なんて、今でもまるで想像できない。だが、いつかはそうなるのだろうか。

不意に、亮太は典子のおばさんの言つている言葉が現実味を帯びてくるのを感じた。何だか少し切ない気持ちになつて、どうしてそんな気持ちになるのか亮太自身戸惑う。

(いつもはあんまり近くにいるから気が付かなかつたけど、確かに

にかわいいよな、典子は。料理もうまいし…)

クラスの男子達から、時々からかわれるのも今なら何となく納得がいく。

『典子だつて、女の子なんだぜ』

ふと、真吾の言つた台詞が思い出される。

真吾がそう言つたのは、亮太がわかっているつもりでその事を忘れているのに気が付いていたからだろう。

(そうだな…こいつ、女の子だつたんだよな…)

ドキドキした理由が、やつとわかつたような気がした。

(…昔からずっと、ずっと一緒にだつたんだもんな…)

泣き虫だった亮太の側にいつもいて、慰めてくれた典子。

亮太がいじめられそうになつたときにかばってくれた典子。

宿題を写させてくれた典子。

引っ越しを手伝ってくれた典子。

そして、料理を作つてくれる典子。

亮太は、典子の事がとても大切に思えた。今まで余りにも当たり前すぎて、身近にありすぎて忘れていたのだ。

(…幼なじみ、か…)

いつもはその一言ですませてしまつてはいるが、一体、それはどういう関係なのだろう。ただずつと一緒にいただけという、本当にそれだけの関係なのだろうか。亮太にはちょっと違うように思えた。そしてまた、それは単なる『友達』とも違う。もちろん、『恋人』ではないのも確かだが、ある意味では普通の恋人以上であるとも言えるような気がした。

(…友達じゃない恋人じゃない、か…)

その二つが同一線上にあるものだとしたら、『幼なじみ』は一体どの辺りに位置するのだろう。そして、もしそれが同一線上にはないとしたら、やはり『幼なじみ』はどこに位置しているのだろうか。

(…何なんだろ…俺達の関係つて…)

電車は「ゴトゴト」と規則正しい音を立てながら走り続けている。

「…つかんねーや…」

眠たげにそう咳き、亮太はもたれかかって眠っている典子を起さないよう控えめに欠伸^{あくび}をする。ちらりと典子の方に目をやると、典子は相変わらず安心しきつた表情で亮太の肩にもたれかかり、すやすやと穏やかな寝息をたてている。

(…まあとにかく…ありがと…典子…)

心の中でそう咳きながら亮太もいつの間にか眠りの中に落ちていった。窓に映る寄り添つて眠る一人の姿は、まるで恋人達のようだ。ガターンゴトン、ガターンゴトン…。

「次は…」

乗客もまばらな車内に、次の停車駅を告げるアナウンスが流れる。やがて電車は徐々にその速度を落とし、駅へと入っていく。空にはたくさんの星達が輝いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3840d/>

セピア2 友達じゃない恋人じゃない

2010年10月17日03時30分発行